

Title	なぜ文化資本は女性の教育達成における有利さを引き出すのか：文化資本の文理差の計量分析
Author(s)	渡辺, 健太郎
Citation	年報人間科学. 2022, 43, p. 43-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86458
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈論文〉

なぜ文化資本は女性の教育達成における有利さを引き出すのか ——文化資本の文理差の計量分析

渡辺健太郎

論文要旨

教育社会学や社会階層論における文化的再生産論の実証研究では、文化資本が教育達成における有利さへと結びつくことが確認されてきた。しかし、国内の実証研究では、文化資本は、誰の教育達成にとっても有利に機能するのではなく、女性の教育達成において顕著に機能するということがわかっている。

本稿では、この問いに答えることを目的として、芸術文化資本および読書文化資本の文理差についての計量分析を行った。分析から明らかになったのは、次の2点である。第1に、芸術文化資本と文系の間には関連がみられないが、読書文化資本は文系において多く保有される。第2に、文系の読書文化資本の多さは、専攻分野によらない女性の読書文化資本、そして、文系で多く蓄積される男性の読書文化資本から構成される。

以上の分析結果から、文系の文化としての読書文化が教育システム側の条件となることで、文系をジェンダー・トラックとする女性において、読書文化資本による教育達成が可能となっていた可能性が示唆された。

キーワード

ジェンダー、文化資本、専攻分野、文系、理系

1. 問題の所在

教育社会学や社会階層論における文化的再生産論は、教育達成における階層間の不平等を文化の視点から説明する理論として、多くの実証研究を生んできた(DiMaggio 1982; De Graaf 1986; Jæger 2009)。これらの研究では、文化資本が教育達成における有利さへと結びつくことが指摘されてきたが、国内の教育達成における文化的再生産のプロセスには、ジェンダー差がみられることがわかっている。片岡栄美の一連の研究(片岡 1998a, 1998b)によれば、教育達成における文化的再生産のプロセスは女性に顕著に観察できるという。つまり、文化資本は、誰の教育達成にとっても有利にはたらくのではなく、女性の教育達成において有利に機能するということだ。

では、なぜ文化資本は女性の教育達成における有利さへと結びつくのだろうか。この問いに対して、本稿では、専攻分野に注目した説明を試みる。文化的再生産論にもとづけば、何が文化資本として機能するのは教育システムの文化に依存する。そのため、理論的には、女性の教育達成において文化資本が顕著に機能するのであれば、それは男女で分化した教育システムが文化的に異なっているということの意味する。

今日の日本社会において、ジェンダー分化した教育システムは、主に文系と理系を指すが、それらの専攻分野が文化的に異なる空間であるのかは、これまで明らかにされてこなかった。そこで本稿では、芸術文化資本と読書文化資本に注目して、専攻分野と文化資本の関連について検討する。

2. 先行研究

2.1 なぜ文化資本は教育達成における有利さを引き出すのか

P. Bourdieu and J. Passeron (1964=1997, 1970=1991)の文化的再生産論¹⁾、教育達成における階層間の不平等を説明する主要なメカニズムの1つとして、教育社会学や社会階層論の計量研究の対象となってきた²⁾。そして、文化資本が教育達成における有利さを引き出すことや、その文化資本が親から相続したものであること、そして、その親の文化資本は親の学歴や職業によって異なることが確認されてきた (DiMaggio 1982; De Graaf 1986; De Graaf et al. 2000; Sullivan 2001; Jæger 2009)。

では、そもそも、なぜ文化資本の保有は教育達成における有利さへとつながるのだろうか。それは、文化資本による教育達成を可能とする条件が、教育システムの側に存在すると考えられているためだ。この点について、Bourdieu and Passeron (1964=1997) は、次のように述べている。

「出身家庭から受け継いだもろもろの文化的慣習や性向の直接的な作用は、学校での最初の方向づけ（それ自体も当初の決定条件によって左右される）の増副作用によって倍加され、その方向づけがさらに、結果として生じた決定条件の作用を誘発する。それらの決定条件は、社会的不平等を無視するような顔をしながらじつはそれを正統なものとして認定する種々の価値判定という形で、文字通りに学校的な論理のうちに表現されてくるだけに、ますます有効性を発揮するのである」 (Bourdieu and Passeron 1964=1997: 27)。

ここでBourdieu and Passeron (1964=1997) が指摘しているのは、教育システムにおける成功の背景には、教育システムのもつ文化があり、これが条件となって、それらの文化に親しむように方向づけられてきた個人が、これまでの文化的経験を、学校教育におけるさまざまな選抜に有利な資本として用いることが可能となるということである。

こうした文化的再生産論の想定に従えば、どのような文化的経験であっても教育達成における文化資本として機能するというわけではないということになる。なぜなら、理論的には、ある文化的経験が教育達成上の文化資本として機能しうるかは、その文化的経験が教育システムのもつ文化と親和的か否かに左右されるためだ。

2.2 どのような文化的経験が教育達成における文化資本として機能しうるのか

では、どのような文化的経験が教育達成における文化資本として機能しうるのだろうか。この点に関して、

P. DiMaggio (1982) は、アメリカの高校生を対象とした調査データの分析から、演劇や芸術、文学など、高級文化領域での活動からなる文化資本が教育達成に影響することを報告している。

オランダにおける文化資本と教育達成の関連について検討した N. D. De Graaf et al. (2000) は、オランダの教育システムが、フランスのような高級文化が組み込まれたカリキュラムとなっていないことをふまえ、文化資本を芸術文化資本と読書文化資本の2つに分けて分析を行った。その結果、芸術文化資本ではなく読書文化資本が子どもの教育年数に対して影響することが報告されている。

教育達成における読書文化資本の重要性は、イングランドでも確認されている。16歳時の成績に対する文化資本の影響をイングランドで分析した A. Sullivan (2001) は、親の文化資本が子どもの読書と教育的内容のテレビ視聴のかたちで相続され、文化的知識の獲得や言語能力の上昇が生じ、子どもの教育達成に影響するという分析結果をふまえ、発話や識字に関する資質が文化資本となりうることを示している。

以上の欧米の計量研究からは、分析対象とする国の教育システムによって、どのような文化的経験が文化資本として機能するのかについて多少の異同は含みつつも、共通して、読書が教育達成を有利に進める文化資本として重要であるということがわかる。

2.3 女性に顕著な読書・芸術文化資本による教育達成

文化的再生産論にもとづく計量研究は、国内でも展開されてきた。まず、文化資本の相続過程に関しては、1995年「社会階層と社会移動調査」(SSM調査)データの分析から、ジェンダーに関わらず、幼少時の文化的経験は両親学歴や父親の職業によって規定されることが明らかにされている(片岡 2019)。また、全国調査によるパネルデータを用いた分析でも、親学歴と世帯収入が親の読書量に影響し、親の読書量が子どもの読書量に影響するという、親から子への文化資本の相続過程が明らかにされている(松岡ほか 2014)。

しかし、文化資本による教育達成に関しては、ジェンダー差がみられることがわかっている。同SSM調査データの分析を行った片岡(1998a)は、幼少時の文化的経験が中学3年生時の成績に転化され、高い学歴の獲得につながるというプロセスが、女性で顕著にみられることを明らかにしている。また、幼少時の文化資本を読書文化と芸術文化に区別すると、男性ではいずれの幼少時文化資本も顕著な効果を持たないものの、女性では幼少時の読書文化資本が中学3年生時成績に影響すること、そして、芸術文化資本に関しては、中学3年生時の成績だけでなく、エリート高校への進学や教育年数に影響することが明らかにされている(片岡 1998b)³⁾。

以上の先行研究からは、文化資本は親から子どもへと相続されるものの、読書文化資本であれ、芸術文化資本であれ、それが教育達成における有利さへと結びつくのは女性に顕著な傾向であるということがわかる。

では、なぜ女性では文化資本による教育達成が可能なのだろうか。この点に関して、片岡(1998b)は、文化資本の構成や教育達成の指標としての主観的成績評価が、理科系よりも文科系に偏っている可能性を指摘している。これは、換言すると、理科系に親和的な文化資本項目によって測定したり、理科系科目で

の成績評価を用いたりすることによって、男性でも文化資本による教育達成が観察できる可能性があるという指摘である。しかし、この説明は、文化資本による教育達成のジェンダー差を説明するものではあるが、既に女性で観察されている、読書文化資本と芸術文化資本による教育達成がなぜ生じているのかを説明するものではない。

そこで、当初の議論に立ち返ると、Bourdieu and Passeron (1964=1997) の文化的再生産論では、教育システムにおける成功の背景には、教育システムの文化があり、これが条件となって、特定の文化的経験が文化資本として機能するということが想定されていた。この理論的想定に従えば、男性で読書文化資本や芸術文化資本による教育達成が難しいのは、男性が経験する教育システムがそれら文化資本と親和的でないためであり、女性で読書文化資本や芸術文化資本による教育達成が顕著なのは、女性の経験する教育システムがそれら文化資本と親和的であるためだと考えることができる。すなわち、文化資本による教育達成におけるジェンダー差は、ジェンダーによって分化した教育システムの文化の問題として考えることができる。

2.4 女性のジェンダー・トラックとしての文系

90年代までの議論において、女性の高等教育進学が多くを占めるのは、短期大学への進学と4年制大学の人文社会系（以下、文系）学部への進学であることが指摘されてきた（天野 1988; 中西 1998; 木村 1999; 杉原・喜多 1995）。以下では、ジェンダーによって水路付けられた教育システムをさして、ジェンダー・トラックという概念を用いることにする。中西祐子（1998）は、学力にもとづく進路分化であるアカデミック・トラックと区別して、ジェンダーにもとづく進路分化の存在を指摘するために、ジェンダー・トラックの概念を用いている。中西（1998）自身は、学校間にみられる進路分化に対してジェンダー・トラックの概念を用いていたが、特に本稿では、後述する専攻分野のジェンダー分化を捉えるための概念として使用する⁴⁾。

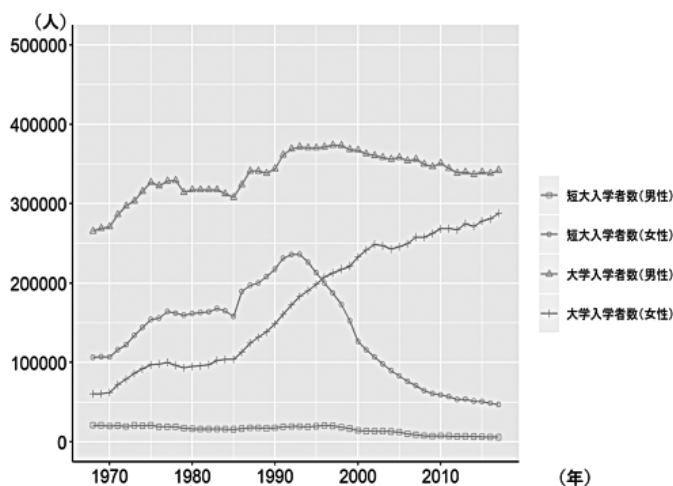


図1 男女別にみた大学・短期大学入学者数の推移

(出典：広島大学高等教育研究開発センター『高等教育統計データ集』より、筆者集計)

女性のジェンダー・トラックとして指摘されていた2つの高等教育機関うち、短期大学については、90年代前半には約25万人の入学者を受け入れており、その80%以上が女性であった。しかし、短期大学入学者は、90年代後半から一貫して減少しており、2000年代に入ってから10万人を下回るというかたちで、大幅な規模縮小をみせている（図1）。その一方で増加を続けてきたのが女性大学入学者であり、1980年代前半までは10万人ほどであったが、従来の短期大学入学者層を取り込むかたちで、2000年代半ばには約25万人にまで増加した（図1）。

90年代までの議論でも、文系学部の女性のジェンダー・トラックとしての性格は指摘されていた。しかし、もう1つのジェンダー・トラックであった短期大学の規模縮小を受け、今日の文系学部の女性のジェンダー・トラックとしての位置づけは、より際立つ格好になっている（図2）。文系学部の構成は、2000年以前と以後で人文学が占める割合は異なっているのだが、ジェンダー・トラックとしての文系学部という趨勢は、60年代以降継続して観察されている。

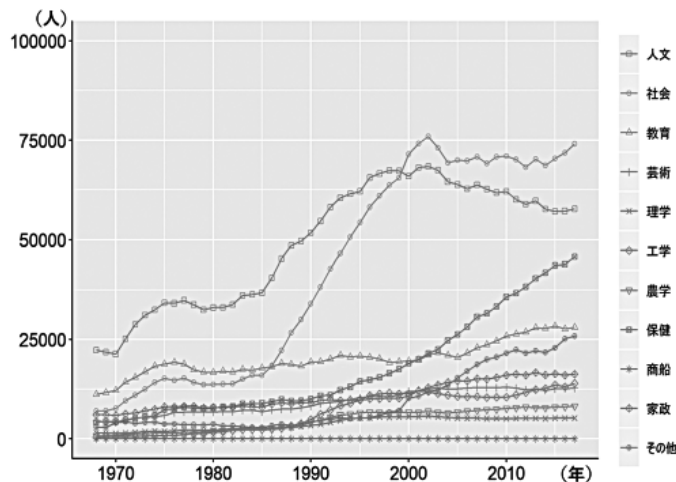


図2 専攻分野別にみた女性大学入学者数

（出典：広島大学高等教育研究開発センター『高等教育統計データ集』より、筆者集計）

2.5 専攻分野と文化資本

専攻分野(major, field of study)とは、高等教育に存在する1つの教育課程である。そして、専攻分野は、高等教育における「学問分野(discipline)」によって区別されている。(1)「discipline」がラテン語の「学ぶ、勉強する」という意味の「discere」に由来すること、(2)「私の専攻分野」や「専攻分野選択」という語用法がみられることをふまえば、専攻分野とは、高等教育において学ばれる対象としての知識、およびその集合だということになる。ここまでの議論で、女性にとってのジェンダー・トラックとしての構造をもつことをみてきた「文系」も、「理系」との対比で使用される専攻分野の1カテゴリであり、人文科学と社会科学から構成される学問領域およびその学部を指す。

ヨーロッパ圏での計量研究では、専攻分野が異なる文化資本を保有する空間であることが示されてきた。

例えば、オランダのデータ分析を行ったH. G. Van de Werfhorst & G. Kraaykamp (2001) は、専攻分野ごとに、経済資本、文化資本、対人資本、技術資本という異なる4つの資本が蓄積されることを示し、芸術や人文学、教育学といった専攻分野では文化資本が多く保有されており、その蓄積された文化資本が、文化施設利用や読書に正の効果を有することを明らかにしている。また、M. Börjesson et al. (2016) は、スウェーデンの大学生調査データを用いた多重対応分析の結果から、ミニシアターでの映画視聴や文化的メディアへの接触などから構成される文化には、芸術や政治学、人文学といった専攻分野が対応することを明らかにしている。

一方で、国内では、文理に限らず、それぞれの専攻分野がどのような文化資本を保有するののかについて、ほとんど検討されてこなかった⁵⁾。これは、教育と文化資本の関連が、主として教育水準によって把握されてきたためだ。国内研究における例外として、岩本健良 (1998) による1995年SSM調査データの分析がある。そして、その岩本 (1998) の分析では、読書や芸術を含む文化活動に関しては、文理差はみられないことが報告されている⁶⁾。しかし、この知見は男性サンプルのみに限定した分析から得られたものであるという点で、大卒層全体としての文化活動の文理差について言及するものではない。そのため、文理という専攻分野と文化資本の関係は、国内では明らかになっていない。

3. 仮説

文化的再生産論にもとづけば、女性で読書文化資本や芸術文化資本による教育達成が確認できるのは、女性の経験する教育システムがそれら文化資本と親和的であるためだということになる。そして、今日に至るまで、女性にとってのジェンダー・トラックとして機能してきたのは、大学の文系学部であった。以上から、女性で読書文化資本や芸術文化資本による教育達成が確認できるのは、文系学部が、読書文化資本・芸術文化資本を多く保有する専攻分野であるためだと考えられる。よって、以下の2つの仮説が導かれる。

仮説 1a：文系は理系に比べて、芸術文化資本の保有量が多い

仮説 1b：文系は理系に比べて、読書文化資本の保有量が多い

文系の文化資本の保有量は、ジェンダーによっても異なるとも考えられる。文系学部が女性にとっての主要な高等教育進学先であることは既にみたが、女性では読書や芸術を含む文化活動への参加が活発であることが知られている (中井 2011)⁷⁾。しかし、専攻分野と文化資本の関連は、ジェンダーを統制したうへでも確認されている (Van de Werfhorst and Kraaykamp 2001)。だとすれば、文系と文化資本の関連は、文化的活動の活発さが報告されてきた女性と、そうでない男性とでは、後者、すなわち男性においてより強く関連すると考えられる。よって、以下の2つの仮説が導かれる。

仮説 2a：文系は理系に比べて、芸術文化資本の保有量が多いという関連は、男性に顕著である

仮説 2b：文系は理系に比べて、読書文化資本の保有量が多いという関連は、男性に顕著である

4. データと使用変数

分析には、「2015年階層と社会意識全国調査」(SSP2015) データを用いる。同調査は、全国の20~64歳の男女を母集団として、選挙人名簿を用いた層化3段無作為抽出によって抽出された9,000名を対象に実施された。有効回収件数は3,575件であり、回収率は43.0%である。SSP2015データは全国調査データであり、文化資本と専攻分野に関する変数を含んでいるため、本稿の関心に合致している⁸⁾。分析に用いるのは、文系もしくは理系大学学部卒業生647ケースである⁹⁾。

従属変数である、芸術文化資本には、「クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く」頻度と「美術展や博物館に行く」頻度の単純加算得点を使用し、読書文化資本には「小説や歴史の本を読む」頻度、「図書館に行く」頻度の単純加算得点を使用する¹⁰⁾。

独立変数には、専攻分野を用いる。専攻分野は、最終学歴が「大学の人文社会系学部(四年制)」の場合を1、最終学歴が「大学の理工系学部(四年制)」の場合を0とする、文系のダミー変数として使用する。

表1 各変数の平均値と度数分布

芸術文化資本	5.431 (1.746)	専攻分野		
読書文化資本	5.981 (1.983)	文系	477	74%
性別		理系	170	26%
男性	431 67%	雇用形態		
女性	216 33%	正規雇用	437	68%
年齢	44.032(11.607)	非正規雇用	92	14%
居住地人口規模		自営業	30	5%
10万人未満の市・郡部	164 25%	無職	88	14%
10万人以上の市	106 16%	世帯収入(対数変換)	6.487 (0.749)	
20万人以上の市	166 26%	父親教育年数	12.696 (3.173)	
政令指定都市	211 33%	相続文化資本	0.700 (0.500)	

1. 括弧内は標準偏差

統制変数には、性別、年齢、居住地人口規模、雇用形態、世帯収入、父親教育年数、相続文化資本を用いる。性別は、男性ならば0、女性ならば1の値をとる、女性のダミー変数として用いる。居住地人口規模には、政令指定都市／20万人以上の市／10万人以上の市、10万人未満の市・群部の4カテゴリをダミー変数として使用する。雇用形態については、正規雇用／非正規雇用／自営業／無職の4カテゴリを使用する。世帯収入は、対数変換して使用する。相続文化資本には、「子供部屋」、「学習机」、「ピアノ」、「文学全集・図鑑」、「美術品・骨董品」を用いる。山本耕平(2019)を参考に、それぞれの相続文化資本の非所持割合を20代、30代、40代、50代以上という4つの年齢コーホートごとに算出したスコアを所持者に割り当て、その合計を相続文化資本として用いる。以上の変数の記述統計量については、表1に示した。

5. 分析

表2 芸術文化資本と読書文化資本を従属変数とした重回帰分析

	芸術文化資本				読書文化資本			
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
(定数)	0.714	0.718	0.720	0.721	1.117	0.859	0.963	0.860
女性	1.117 **	0.160	1.088 **	0.339	0.449 *	0.192	1.185 **	0.404
年齢	0.027 **	0.006	0.027 **	0.006	0.024 **	0.007	0.024 **	0.007
居住地人口規模								
10万人未満の市・郡部 (ref.)								
10万人以上の市	0.204	0.199	0.205	0.200	0.465	0.239	0.446	0.238
20万人以上の市	-0.069	0.176	-0.068	0.177	0.314	0.211	0.301	0.211
政令指定都市	0.522 **	0.169	0.522 **	0.169	0.255	0.202	0.236	0.202
文系	0.080	0.147	0.073	0.165	0.714 **	0.176	0.898 **	0.197
雇用形態								
正規雇用 (ref.)								
非正規雇用	-0.374	0.199	-0.373	0.200	0.055	0.238	0.024	0.238
自営業	0.125	0.310	0.125	0.310	-0.741 *	0.371	-0.738 *	0.370
無職	-0.128	0.212	-0.128	0.213	0.126	0.254	0.135	0.254
世帯収入(対数変換)	0.301 **	0.088	0.301 **	0.088	0.279 **	0.106	0.279 **	0.105
父親教育年数	0.063 **	0.022	0.063 **	0.022	0.087 **	0.027	0.087 **	0.027
相続文化資本	0.317 *	0.135	0.316 *	0.136	-0.011	0.162	0.017	0.162
交互作用								
文系×女性			0.035	0.361			-0.891 *	0.431
R ²	0.182		0.182		0.092		0.098	

表2は、芸術文化資本と読書文化資本を従属変数とした重回帰分析の結果である。芸術文化資本について、交互作用項を投入しない場合、投入した場合ともに、女性、年齢、居住地人口規模、世帯収入、父親教育年数、相続文化資本の効果が確認できる。しかし、文系の効果は確認できず、仮説1aおよび2aは支持されなかったといえる。

読書文化資本の分析結果について、交互作用項を投入しない場合では、理系に比べて文系で読書文化資本が多く保有されることがわかる(仮説1bの支持)。専攻分野以外には、ジェンダー、年齢、人口規模、雇用形態、世帯収入といった要因が読書文化資本と関連していることが確認できる。特に、ジェンダーに関しては、女性の方がより多くの文化資本を保有することが指摘されてきていたが、そのジェンダーの効果とは独立に文系学歴が効果を有している点については、ジェンダー・トラックとしての文系の効果が、必ずしも女性の多さという実態的な効果だけに還元できるものはないということを意味していると考えられる。同様に、父親教育年数の効果が確認でき、出身階層は同一教育段階の文化資本に対しても影響することがわかるが、それでもなお文系の効果がみられることから、文系と読書文化資本の関連は、出身階層とはある程度独立した関連だといえる。

文系の効果がジェンダーによって異なることが考えられたため、交互作用効果についても検討した。分析の結果、交互作用効果自体は5%水準で統計的に有意であった。その予測値は、図3にプロットした。図3から、男性では、文系であるか理系であるかによって生じる読書文化資本の保有量の差異が、女性の

場合よりも大きくなっていることが確認できる。女性の場合では、文理に関わらず読書文化資本の得点が2.1ポイントほどとなっているが、男性の場合では、理系で0.963ポイントであるのに対し、文系で1.861ポイントと差が開いている。つまり、読書文化資本の文理差は男性において顕著であるといえる（仮説2bの支持）。

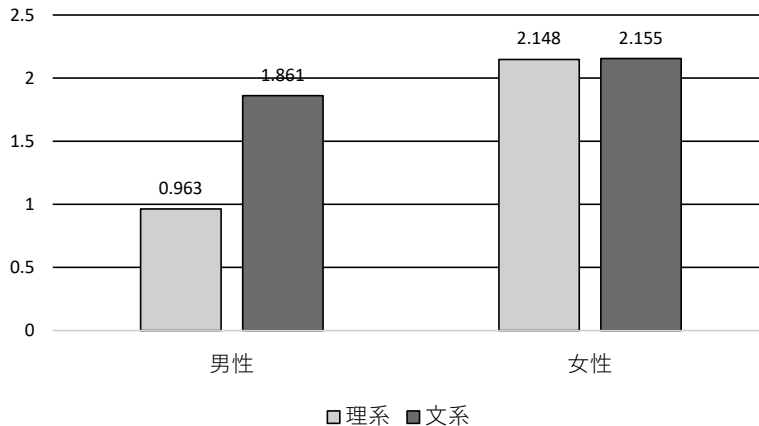


図3 読書文化資本の予測値

よって、先のモデルで確認した文系の効果は、その内実としては、文系男性の読書文化資本の効果を強く反映したものであると考えることができるだろう。つまり、専攻分野によらない女性の読書文化資本、そして、文系に多く蓄積される男性の読書文化資本、この2つが文系の読書文化資本を構成していると考えられる。

6. 考察と議論

6.1 分析結果について

本稿では、なぜ文化資本による教育達成は女性に顕著であるのかという問いから出発し、先行研究の知見をもとに、女性にとってのジェンダー・トラックである文系学部が条件となっている可能性について検討してきた。

本稿の分析から明らかになったのは、以下の2点である。第1に、芸術文化資本と文理の間には関連がみられないが、読書文化資本は文系において多く保有される。第2に、文系の読書文化資本の多さは、専攻分野によらない女性の読書文化資本、そして、文系で多く蓄積される男性の読書文化資本から構成される。

1点目に関して、先行研究（岩本 1998）では、SSM1995データの男性サンプルの分析から、読書や芸術を含む文化活動には、文理差がみられないことが報告されていた。しかし、SSP2015データの男女サンプルを用いて、読書文化資本と芸術文化資本を個別に分析した場合は、理工系よりも文系で読書文化資本が多く保有されることがわかった。

芸術・読書文化資本による教育達成のジェンダー差は（片岡 1998b）、理論的には、それら文化資本の文理差を意味していたが、芸術文化資本における文理差は確認されなかった。この点については、本稿で提示したデータから考察できることは少ないものの、1つには、文系の構成の変化を挙げるができるのかもしれない。片岡（1998b）の分析に使用されているサンプルは、1995年時点で20歳以上であった対象者によって構成されていることから、コーホートとしては1993年以前大学入学コーホートということになる。この前後では、文系が人文学を中心としたものから、社会科学と人文学を中心としたものへと変容している（図2）。社会科学と人文学を中心とした今日の文系であっても、それらは文献学を基盤とすることから読書文化資本との親和性がみられたと考えられるが、芸術文化資本は必ずしも社会科学と親和的とは限らないために、芸術文化資本の文理差はみられなかったのかもしれない。

2点目に関して、先行研究では、女性ほど芸術や読書に関する文化活動が活発であることが指摘されていた（中井 2011; 片岡 2019）。しかし、本稿の分析結果から明らかになったのは、必ずしもジェンダーの次元だけには還元することのできない専攻分野の効果であった。専攻分野は、教育と文化資本の関連を問うなかで、必ずしも経験的な検討の対象とはなっていないが、本稿の分析結果は、専攻分野に注目することの重要性を示している。

もちろん、既にみたように、専攻分野と文化資本の関係はジェンダーと無関係なのではない。少なくとも、読書文化資本に関しては、文理という専攻分野とジェンダーの重層的な関係が想定される必要がある。

6.2 議論

なぜ文化資本による教育達成は女性に顕著であるのかという問いに立ち戻るならば、次のように答えることができるのかもしれない。それは、文系の文化としての読書文化が教育システム側の条件となることで、文系をジェンダー・トラックとする女性において読書文化資本による教育達成が可能となっていたという可能性である。教育システムにおける成功の背景には、教育システムのもつ文化があり、これが条件となって、文化資本による教育達成が可能になるというのが、文化資本論の理論的想定であった（Bourdieu and Passeron 1964=1997）。この理論的想定に従えば、女性にとってのジェンダー・トラックとしての文系学部には、読書と親和的な文化があり、そこで資本として機能する読書文化を通じた教育達成の可能性を考えることができる。

より具体的には、女性の読書文化資本が教育達成へとつながるプロセスが、幼少時読書文化資本から中学3年生時成績、そして、教育達成への転化であることをふまえるならば（片岡 1998b）、中学3年生時成績が文系学部への進学と関りが深い科目となっている可能性を考えると（片岡 1998b）¹¹⁾。文系学部への進学と関りが深い科目というと、一般的な大学入試における二次試験の科目構成などからも、国語や英語を中心とした言語に関係する科目だと考えられる。

以上の言語に関係する科目が読書文化資本による教育達成の媒介項となっている可能性は、片岡（1998a）の議論のみに依拠しているわけではない。例えば、文化資本が具体的にはどのようなプロセスで教育達成に影響するのかについて検討したSullivan（2001）は、発話や識字に関する資質が文化資本として機能す

ることを指摘している。

ただし、以上の議論には限界もある。本稿で明らかになったのは、あくまで女性のジェンダー・トラックとしての文系学部と読書文化資本との関連である。そのため、実際に女性の文系学部への進学に読書文化資本が有利にはたっているのかについては、専攻分野選択のメカニズムとして、今後検証されるべき課題となる。

専攻分野選択メカニズムの1つとして文化的再生産論を検証する際に、本稿の分析結果から示唆されるのは、専攻分野に応じた文化資本を想定する必要があるということだ。例えば、本稿の分析結果にもとづけば、大学の文系学部への進学行動における文化資本の指標は、読書文化と芸術文化から構成するのではなく、読書文化から構成する必要があるということになる。同様に、理系学部への進学行動における文化資本の指標は、理系学部の文化にもとづいた指標を構成する必要があると考えられる¹²⁾。

専攻分野選択は、大学進学という教育選択に位置づけられることになるので、上記の議論は大学進学という意味での教育選択メカニズムの問題にもかかわっていると見えるだろう。例えば、大学進学という教育選択メカニズムにおける文化的再生産論の可能性を、読書文化資本を通じて検討する場合などは、暗黙のうちに、文化的再生産論の射程を文系学部への進学行動に狭めてしまっている可能性があるといった問題だ。

繰り返しになるが、本稿の分析的知見は、あくまで文系学歴と読書文化資本の関連にとどまる。よって今後は、専攻分野とさまざまな文化資本の関連について検討する作業、そして、その知見にもとづいて、専攻分野選択メカニズムの1つとして文化的再生産論の射程を見極めていく作業が求められるだろう。

文献

- [1] 天野正子, 1988, 「『性と教育』研究の現代的課題」『社会学評論』155: 266-83.
- [2] Archer, L., J., Dewitt, & B., Willis, 2014, "Adolescent boys' science aspirations: Masculinity, capital and power," *Journal of Research in Science Teaching*, 51(1): 1-30.
- [3] Börjesson, M., Broady, D., Le Roux, B., Lidegran, I. and Palme, M., 2016, "Cultural Capital in the Elite Subfield of Swedish Higher Education", *Poetics*, 56: 15-34.
- [4] Bourdieu, P. and J., Passeron, 1964, *Les Héritiers*, Édition de Minuit. (=1997, 石井洋二郎訳『遺産相続者たち』藤原書店.)
- [5] Bourdieu, P. and J., Passeron, 1970, *La Reproduction*, Édition de Minuit. (=1991, 宮島喬訳『再生産: 教育・社会・文化』藤原書店.)
- [6] De Graaf, P. M., 1986, "The Impact of Financial and Cultural Resources on Educational Attainment in the Netherlands", *Sociology of education*, 59(4): 237-246.
- [7] De Graaf, N. D., De Graaf, P. M., and Kraaykamp, G., 2000, "Parental Cultural Capital and Educational Attainment in the Netherlands: A Refinement of the Cultural Capital Perspective", *Sociology of education*, 73(2): 92-111.
- [8] DiMaggio, P., 1982, "Cultural capital and school success: The impact of status culture participation on the grades of US high school students", *American Sociological Review*, 47: 347-368.
- [9] 岩本健良, 1998, 「教育とライフスタイル選択—文系進学と理系進学」白倉幸男編『社会階層とライフスタイル』

- 1995年SSM調査研究会：46-61.
- [10] Jæger, M. M., 2009, "Equal Access but Unequal Outcomes: Cultural Capital and Educational Choice in a Meritocratic Society", *Social Forces*, 87(4): 1943-1971.
- [11] 片岡栄美, 1998a, 「教育達成におけるメリトクラシーの構造と家族の教育戦略 文化投資効果と学校外教育投資効果の変容」近藤博之編『教育と世代間移動』1995年SSM調査研究会：35-66.
- [12] 片岡栄美, 1998b, 「地位形成に及ぼす読書文化と芸術文化の効果 - 教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益」片岡栄美編『文化と社会階層』SSM調査研究会：171-92.
- [13] 片岡栄美, 2019, 『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』青弓社.
- [14] 木村涼子, 1999, 『学校文化とジェンダー』勁草書房.
- [15] 松岡亮二・中室牧子・乾友彦, 2014, 「縦断データを用いた文化資本相続過程の実証的検討」『教育社会学研究』95: 89-110.
- [16] 中井美樹, 2011, 「消費からみるライフスタイル格差の諸相」佐藤嘉倫・尾島史章編『現代の階層社会1 格差と多様性』東京大学出版会：221-236.
- [17] 中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラック 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版.
- [18] 杉原名穂子・喜多加実代, 1995, 「『男』と『女』の再生産メカニズム—大学生の調査から—」宮島喬編『文化の社会学 実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社：64-97.
- [19] Sullivan, A., 2001, "Cultural Capital and Educational Attainment." *Sociology*, 35(4): 893-912.
- [20] 高松里江, 2014, 「進路選択におけるジェンダー・トラック 男女間・女子内の分化に着目して」『2013年課題公募型二次分析研究会 高校生の進路意識の形成とその母親の教育態度との関連性 研究成果報告書』東京大学社会科学研究所附属社会調査データアーカイブ研究センター：75-90.
- [21] Van de Werfhorst, H. G., and Kraaykamp, G., 2001, "Four Field-related Educational Resources and their Impact on Labor, Consumption, and Sociopolitical Orientation", *Sociology of Education*, 74(4): 296-317.
- [22] Van de Werfhorst, H. G., and Hofstede, S., 2007, "Cultural Capital or Relative Risk Aversion? Two Mechanisms for Educational Inequality Compared", *The British journal of sociology*, 58(3), 391-415.
- [23] 渡辺健太郎, 2020, 「科学資本の構成とそのジェンダー差」太郎丸博編『政治と科学に関する意識調査2019報告書』京都大学文学部社会学研究室：28-34.
- [24] 山本耕平, 2019, 「大学進学女性における専攻分野多様化の背景」『フォーラム現代社会学』18: 88-100.
- [25] 山本裕子, 2012, 「大学の学科構成の変化に関する基礎研究—1990年代以降の分析を中心に—」『大学教育学会誌』34(2): 120-29.

注

- 1) 本稿で用いる「文化的再生産論」は、教育社会学や社会階層論の領域における語用に従う。
- 2) 例えば、H. G. Van de Werfhorst and S. Hofstede (2007) は、相対的リスク回避仮説が教育アスピレーションを通じた教育達成を説明する一方で、文化的再生産は学業成績を通じた教育達成を説明することを明らかにしている。
- 3) 読書の読み聞かせを受けた経験、家庭でのクラシック音楽鑑賞経験、家族との美術館や博物館への訪問経験を合算し、スコア化したものを用いている。なお、前者が幼少時の読書文化資本、後2者が芸術文化資本である。
- 4) 専攻分野をジェンダー・トラックとして位置づけている研究は、他に高松里江 (2014) など。
- 5) なお、専攻分野と文化資本の関連は、教員と技術者の比較などを通じて示唆されてきた (片岡 2019)。ただし、専攻分野と文化資本の関連を直接に検証したものは、後述の岩本 (1998) などにとどまる。

- 6) 岩本 (1998) は、芸術文化資本と読書文化資本の合成尺度得点を、正統文化活動の指標として分析に用いている。
- 7) 中井美樹 (2011) では、[クラシック音楽のコンサートへ行く／美術館や博物館に行く／趣味の習い事・稽古ごと／海外旅行／ボランティア活動]から構成される「ハイブラウ文化」、[図書館に行く／小説や歴史の本を読む]から構成される「中間文化」への参加において、女性が活発であることを確認している。
- 8) 専攻分野に関しては、人文社会系と理工系をはじめとした専攻分野から回答者自身が選択する形式でたずねられているという利点がある。一般に学部・学科のコーディングに関しては、分析者による恣意的な分類の問題がある。特に、文理の判断が困難となる文理融合学部の増加という今日的状況をふまえるならば (山本 2012)、回答者自身による専攻分野の回答データは、本稿の関心に鑑みて適切なものであるといえる。なお、6年制の医歯薬学部という専攻分野の回答選択肢も設けられているものの、ケース数が少ないことから、分析からは除外している。
- 9) 本稿の分析に用いるのはリストワイズによって欠損値処理を行ったデータであるが、多重代入法 (M=100) によって欠損値補正を行った場合でも、本稿の分析結果と同様の傾向が確認される。
- 10) 前2項目は、[1. 月に1回以上／2. 年に1回から数回／3. 年に1回くらい／4 最近5、6年はしたことがない／5. 今まで1度もしたことがない]、後2項目は [1. 週に1回以上／2. 月に1回くらい／3. 年に1回から数回／4. 数年に1回くらい／5. 最近5、6年はしたことがない] という5件法によって測定されている。スケールの等間隔性についての懸念から、1～5の得点スケールを1年あたりに経験した頻度に変換してからの単純加算を試みたものの、むしろ Cronbach の α が著しく低下することから、1～5のスケールでの単純加算得点を用いた。
- 11) これは、片岡 (1998a) の指摘する、女性が文系進路を念頭に成績を回答し、また、文化資本の測定が文系的なものに偏っているために、文化資本から成績、教育達成へのプロセスが観察されたとする説とも整合的であるように思われる。
- 12) 理系分野において有利な文化資本とは何かという観点からは、「科学資本」という概念が提唱されている。科学資本とは、「科学への関与や参加に際しての使用・交換価値をもつ資本を意味する概念であり、異なるタイプの資本を科学との関連という次元で統合して捉えるための概念」(Archer et al. 2014) である。イギリスにおける理工系振興プロジェクトの ASPIRE では、科学の領域における不平等が科学資本によってとらえられている。日本における適用可能性について検討した例は、渡辺健太郎 (2020) など。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP1 8 J 2 0 9 9 8 の助成を受けたものである。また、本研究は JSPS 科研費 16H02045 の助成を受けて、SSP プロジェクト (<http://ssp.hus.osakau.ac.jp/>) の一環として行われたものである。SSP2015 データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可を得た。

Why Does Cultural Capital Brings Out the Advantages of Women's Educational Achievement? —Quantitative analysis of cultural capital differences between SSH and STEM

Kentaro WATANABE

Abstract:

Empirical studies based on the theory of cultural reproduction in the fields of sociology of education and social stratification have confirmed that cultural capital leads to advantages in achieving education. However, domestic empirical studies have shown that cultural capital does not work in favor of just anyone's educational achievement but significantly in women's education achievement. To examine this topic, I conducted a quantitative analysis of the difference between artistic cultural capital and reading cultural capital between Social Sciences and Humanities (SSH) and Science, Technology, Engineering and Mathematics (STEM). Two main findings emerged. First, although there is no connection between artistic cultural capital and SSH, reading cultural capital is largely held in the SSH. Secondly, the large amount of reading cultural capital in the SSH consists of women's reading cultural capital regardless of the field of study and men's reading cultural capital accumulated in the SSH. Based on these findings, it is suggested that reading culture as a culture of SSH became a condition on the education system side, and it was possible for women whose gender track was SSH to achieve education with reading cultural capital.

Key Words : Gender, Cultural Capital, Field of Study, Social Sciences and Humanities (SSH), Science, Technology, Engineering and Mathematics (STEM)